

青い麦

コレット／堀口大學訳

新潮文庫



Title: LE BLÉ EN HERBE
 Author: Gabrielle Colette

	あお い むぎ 青 い 麦 定価はカバーに表 示してあります。
--	---

新潮文庫 赤123 A

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛ご送付 ください。送料小社負担にてお取替えいたします。	発行所 株式会社 新 潮 社 郵便番号 一六二 東京都新宿区矢来町七一 電話 業務部〇三〇二六六五一一 編集部〇三〇二六六五四二一 振替 東京四一八〇八番	発行者 佐藤 亮 一	訳者 堀口 大 學	昭和三十年三月三十一日 発行 昭和四十二年六月十日 二十刷改版 昭和五十三年九月十日 四十一刷

新 潮 文 庫

青 い 麦

コ レ ッ ト
堀 口 大 學 訳

青

い

麦

「漁に行くのかい、ヴァンカ？」

横柄にうなずいて、春先に降る雨の色の眼をした日日草のヴァンカは、そうだよ、見たらわかるじゃないの、これが漁の支度だくらい、と答えた。彼女の継ぎの当ったジャケットも、潮で固くなった足袋靴も、それを証拠立てていた。三年も前に作ったので、今では短くなって膝ののぞいている、青と緑の彼女の格子縞のスカートも、これが蝦や蟹を捕る時の専用品だと、みんなが知っていた。それにまた肩にかついだ二張りのたも網、浜あざみのように毛ばだった空色のベレー帽、こういう七つ道具を見ただけでも、これが漁の支度だくらいわかりそうなものではないだろうか？

彼女は自分に声をかけた若者のそばを素通りし、はっそりした形のよい素焼色の脛を大腿に運んで、渚の岩場の方へと下りて行った。フィリップは、今年のヴァンカと、去年の暑中休暇のヴァンカを比べながら、歩いて行く彼女を見送った。この上もつと、背丈を伸ばすつもりだろうか？　そろそろもう止してもよい頃だ。丈ばかり伸びるので、肉は去年以上にはついていなかった。固い金色の薬みために拡がる短い髪は、四カ月この方延ばし放題にしているのだが、未だに編むことも巻くこともできはしない。頬も手先も日やけで黒い、襟元は、髪の陰で牛乳のように白い、つつましかに微笑するかと思うと、声を立てて大笑いもする、まだふくらみの目立た

ない胸に、ボレロもジャケツも、もの惜しみでもするようにびったり着こなす、そうかと思うと、海へ入る時なぞ、スカートも半ズボンも、少年同様の暢気さで、できるだけ高々と捲り上げる。

背の高い草の生えた砂丘に寝転んで、彼女をうかがっていたこの友は、十文字に重ねた腕の上に、えくぼで二つに割れた顎を揺すぶっていた。ヴァンカの方が十五歳半になったのだから、彼は十六歳半のわけだ。子供の頃は、ずっと仲の良かった二人なのに、青年になりかけると、次第にしくりしなくなった。去年早くも二人は、苦い口喧嘩を、陰険ななぐり合いをしたものだった、それがこの頃では絶えず二人の間に沈黙が重苦しくのしかかってくるので、彼らは無理な会話をしようと努めるよりは、むしろふくれっ面をしている方がましだとさえ思うようになっていた。だが狩猟やごまかしのために生れてきている狡いフィリップは、自分の沈黙を神秘めかせたり、自分の邪魔になるものを逆に武器として利用したりした。彼は諦めたような格好をしてみせて、《言ったところでしようがないじゃないか？……》。どうせあんたにはわかりっこないんだもの……》と言ったりするが、ヴァンカの方は、ただ黙り込むこと、自分の気持を告げたいのに告げずにいること、相手の気持が知りたいのに尋ねかねて苦しむことしかできなかった。彼女はまた、すべてを任せたいという早熟な激しい本能に対して、日毎にvariety 一時間毎により遅くなりつつあるフィリップが、毎年七月から十月までの間、海の上に傾いたこの鬱蒼とした森の中へ、黒い角又の毛に覆われた岩場へ、彼を導いてくる細い錨索を断ち切りはしないかとの恐れに對して、身を強張らせることしかできないのだった。早くも彼は、見るともなしにこの女友達を、透明で流動する、取るにも足りないものでもあるかのように、じっと厭らしい目つきで見つめたり

することさえあるではないか。

彼女が彼の足元に身を投げ出して、**「フィル！　意地悪をしないで……。」**わたし、あんたを愛してるんだから、フィル！　わたしをどうなりと好きにして頂戴、ねえ、フィル、何か言つてよ……」とばかり、女らしい気持を打ち明けるのは、多分来年のことになりそうだ。でも今年の彼女はまだ、子供っぽい頑なな尊大さを失っていない、そのため彼女は抵抗する、ところが、フィルには、この抵抗が気に入らない。

彼は、こんな時に海の方へと下りて行く、肉はまだつききっていないながら、すでに美しいこの娘をじつと見つめていた。彼には別に、彼女が愛撫したいわけでも、殴りたいわけでもなかった、ただ彼は彼女を、信頼のできる、自分だけに約束されたものにしておきたかった、言うも恥ずかしい彼の宝物——押し花にした花びらやら、瑪瑙のビー玉やら、貝殻やら、草の実やら、絵草紙やら、小ぢやかな銀の懐中時計などのように、自分の思いのままになるものにしておきたかった……。

「待つて、ヴァンカ！　僕も一緒に漁に行くよ！」彼が叫んだ。

彼女は歩調をゆるめはしたが、振向きはしなかった。彼は二、三步大股に飛んで追いついた、そして、たも網の一張りを彼女から奪った。

「なぜ網を二張りも持ってきたんだい？」

「袋の小さい方のは小さい穴で使うために持ってきたのよ、それからもう一つの方は、いつものわたしのたも網じゃないの」

彼は、青い眼の中に自分の一番優しい黒い眼差しを注ぎ込んだ。

「では僕のためじゃなかったんだね？」

同時に彼は險阻な岩の隘路を越えさせるために、彼女に手を差しのべるのだった、するとヴァンカの日やけた頬に、さっと血の色が上った。変った身振りの一つ、変った目つきの一つが、彼女を狼狽させるに十分だった。昨日も、二人は連れ立って、穴から穴へ探りながら、断崖の裾を漁り回ったが、お互いに助け合ったりはしなかった……、彼と同じくらい敏捷な彼女は、これまでもフィルの助けを求めた覚えはなかった……。

「もう少し優しくなれないかい、ヴァンカ！」彼女がぎこちない大袈裟な身振りで手を引っこめたので、彼が微笑しながら、頼むような口調で言った。「何でそんなに僕に辛くあたるんだい？」彼女は、毎日の水くぐりで小黈の入った唇を嚙んだ、そしてふじつばの刺の生えた岩を踏んで歩いた。彼女は黙って考えた、わからないことばかりだった。そういう彼の方がまず変ではないか？ 急に行き届いて、親切になつてみたりして、貴婦人にでもするように、自分なんかに手を差しのべてくれたりして……。海草や、海鼠や、《狼》や、からだ全体が鱗と頭だけのように見えるおこぜや、紅いささ縁をとった黒い蟹や、蝦などの透いて見える、動きのない海水の溜りの中に、彼女は静かに網のポケットを沈めた……。フィルの影が、日の当たっている水面を陰らせた。

「よけて頂戴よ、蝦の上にあんたの影が映るじゃないの、それにこの大きな穴はわたしのよ！」彼はこたわらなかつた、彼女は自分だけで漁った、苛立っているの、普段はどうまくいかなかった。慌てすぎた網さばきに、蝦が十匹も二十四匹も逃げて、岩の隙間にもぐり込み、そこから細いひげを出して、水を探ったり、罌を嘲笑ったりした……。

「フィル！　来て頂戴よ、フィル！　蝦がいっぱいいるのにどうしても捕れないのよ！」彼は不承たらしく近づいてきて、獲物でいっぱいなその小さな淵の上にかがみこんだ。

「当り前だよ！　あんたはやり方を知らないんだもの……」

「よく知ってるわよ、ただわたしには我慢が足りないのよ」ヴァンカが鋭く叫んだ。

フィルがたも網を水中に沈めた、そしてじっと動かさずにとどめた。

「岩の割れ目に、奇麗なのがいってよ……。あんたにあの角が見えなくて？」ヴァンカが彼の肩の後ろで囁いた。

「見えないね、でも平気だよ、出てくるに決っているから」

「あんた出てくると思っているの！」

「決ってるさ。もう出てきたよ、そろそろらん」

彼女が一層身をかがめた、すると彼女の髪が、囚われた短い翼のような具合に、彼の頬を打った。彼女は後退した、次いでまたいつの間にかもとの位置に戻ってきていた、もう一度すぐまた後退るくせに。彼はそれに気づいた様子はなかったが、あいている方の手が、ヴァンカのむき出しの日やけた潮の香のする腕を引寄せた。

「ごらん、ヴァンカ……。一番立派な一匹が出てきたよ……」

引つ込めたヴァンカの腕が、フィルの掌の中を、手首の所まで、腕輪の中をすべるような具合に走った、彼が握り締めていなかったためだ。

「捕れるのですか、あんたになんか、フィル、それ、また引つ込んでしまったじゃないの……」その蝦の行方を追うために、ヴァンカは、軽く輪になった掌の中に、肱の所まで自分の腕を引

戻した。緑の水の中で、姿の長い灰色の瑪瑙のような車蝦が、足の先やひげの先で、たも網の縁を探っていた。今こそ、さっと引上げる時機だった……。それなのに、漁師の方が、ぐずついていた、ともすると彼が、自分の掌の中に、大人しく動かずにいるその腕を、しばらく征服されていま自分の肩によりかかつてはいるが、やがてまた荒々しく離れ去る髪に包まれたこの頭の重量を、心楽しく味わっていたためかもしれない……。

「早く、フィル、早く網をあげなさいよ！　あら、逃げてしまったわ！　なぜ逃がしてしまったのよ？」

フィルは溜息をついた、自分の女友達の上に視線を落したが、そこには、いささか驚いた自負心が自分の勝利を幾分輕蔑しているように見えた。自由になりたがりもしないか細い腕を、彼は放してやった、そして、たも網で、澄んだこの水溜りをひっ掻き回しながら言った。

「なあに！　きっとまた戻ってくるよ……。待っていさえすればいいんだよ……」

二

二人は並んで泳いでいた、彼の方がよけいに皮膚の色が白く、濡れた髪の下に黒い頭は円かった、ブロンドの彼女は日にやけて、青いネッカチーフを頭に巻いていた。無言のしかも完全な楽しみのこの毎日の海水浴が、二人の今の困難な年齢に、平和と少年期という二つともおびやかされているものを、返してくれるのだった。ヴァンカは波の上に浮き身をした、小さな臍脇のよう

うに、空中に水を吹き上げた。振れたネッカチーフの下から、昼の間は髪に隠されている薔薇色

の愛らしい耳と、水浴の時にだけしか日の目を見ない白い肌とが、こめかみのまわりにのぞいていた。彼女はフィリップに向って微笑した、すると十一時の太陽の下で、彼女の瞳の愛すべき青が、海の反射でいくらか緑に見えた。フィルが不意にもぐったヴァンカの片足をつかんで波の下から引く張った。彼らは一緒に「飲んだ」水を吐き出したり、息を切らせたりしながら水面へまた浮び上がった、そして、彼女はこの幼友達に対する恋ゆえに切ない自分の十五歳を、彼の方も威張りたい自分の十六歳を、美貌の若者の傲慢を、早熟な所有欲を、忘れたかのように笑いつけるのだった。

「あの岩の所まで泳いで行こう！」水を切って進みながら、彼が叫んで言った。

だが、ヴァンカはついては行かなかった、そして近くの浜へと引揚げた。

「もう帰るのかい？」

彼女は、被り物を、一皮むくような具合に引っぱがした。そして固いブロードの髪を揺すぶりながら言った、

「昼食にお客様が一人あるのよ！ 着換えをするようにとパパが言ってたわ」

彼女は駆けていた、全身濡れたままで、大柄で男の子みたいなた体つきながら、がっちりした骨組と伸びやかな目立たない筋肉のために、さすがにほっそり見えた。フィルの言葉が彼女を止めた。

「あんた着換えるのかい？ 僕はどうしたらいいんだ？ 開襟シャツで食堂へ出てはいけないのかい？」

「いいことよ、フィル！ あんたの好きにするがいいのよ！ それに開襟シャツの方があんたに

ずっと似合うわよ」

ペルヴァンシの日やけしたぬれた顔が、眼が、さっそくまた、懊惱おうれうと嘆願たんげんと同意を求める根強い氣持を現わした。彼は横柄よこがたに黙り込んだ、そのままヴァンカは、松虫草の咲き乱れる海べの草原を登って行った。

フィルは一人残って、水を叩たたきつけながらぶつぶつ言っていた。ヴァンカが開襟シャツを好こうと嫌おうと、彼にはどうだってよかった。《僕はいつだって彼女にはもったいないくらいなものだ……。それに今年、彼女は一度だって、満足だったためしがないのだし！》自分のこの氣紛れな二つの言い草の、はっきりした矛盾むじもんが、彼を微笑みえうさせた。今度自分が波の上に仰向けになつて、唸うなるような沈黙で海水が耳を満たすに任せた。高くなつた太陽を小さな雲が覆おおうたので、フィルは目をあけた、そして、たいしゃく鳴なりの一番ひつがいが、影になつた腹、尖とがつた大きな嘴くちばし、飛行のために折りまげた黒い脚あしを見せて、自分の上を翹とび過ぎるのを眺ながめやつた。

*

《何という馬鹿げた考えを起したものだらう》と、フィリップは思った。《一体どういうつもりなんだろう？　まるでお猿さるが人間の着物着たみたいじゃないか。これから聖体拝領に出かけようとしている黒白の混血女みたいじゃないか……》

ヴァンカの隣には、小さな妹が、大体同じようななりをして、固こい藁わらのようなブロンドの髪の下の日やけのした円顔の中に青い眼をぱちくりさせながら、お皿わさの脇わきの、卓布たふの上に育ちのいい女の子の、握にぎった手首てしうをのせていた。二枚の裾飾りのついたオーガンディーの白い同じようなローブが、アイロンと糊のりをきかせて、姉と妹に着せられていた。《題してタヒチ島の日曜日とござ

い」フィリップが心の中で嘲笑った。へこれほどみっともない彼女は、まだ見たことがないぜ」

ヴァンカの母親、ヴァンカの父親、ヴァンカの叔母さん、フィルとその両親、訪ねてきたパリからの客人が、食卓を、緑いろのジャケット、縞のブレザー・コート、繻^{けんちゆう}紬^{ちゆう}の背広で取巻いていた。例年この二家族が借りることにしているこの別荘に、今日は、焼きたてのブリオシとワックスの匂^{にお}いがした。パリから遠来の半白のその紳士は、海水浴で日やけた大人や、真っ黒くなつた子供たちの間に、色白でみなりの立派な客人として座を占めていた。

「随分変わりましたね、ヴァンカちゃん！」客人が娘に言った。

「何を言い出すことか」ふてくされて、フィルが口の中で呟^{つぶや}いた。

客人は、ヴァンカの母の方へ身を傾けて、小声で打明けた、

「いい娘になりましたなあ！　いい娘に！　あと二年もしたら……見たいものですな！」

ヴァンカはこれを小耳にはさんだ、女らしくて生き生きした眼差しを客に投げてにっこりした。真赤な口が白い歯列の上で裂けた、彼女が自分の名にしている花（日日草^{ベルグアンジ}）のような青い瞳^{ひとみ}が、ブロンズの睫^{まげ}に覆われた、するとフィルまでが目がくらみそうになった。へおや！……彼女、どうしたのかしら？」

布を敷きつめたホールで、ヴァンカはコーヒーの給仕をしていた。彼女は、しゃんと、しかもしとやかに、一種曲芸めいた魅力^{たま}を湛^{たた}えて、動き回っていた。風が吹き込んでテーブルの上を乱すと、ヴァンカは、片足で倒れかけた椅子を支え、顎^{あご}で舞い上がるダンテルのナプキンを押えたまま、しかもどこにも非の打ちどころのない落着きようで、コーヒーを一つのカップに注ぎ続けたものだ。

「ちよつと見てごらんさい、あの様子を！」客人が感服して言った。

彼は、彼女を「タナグラ人形」と呼んでほめた、無理にシャルトルーズ（リキュール酒）を飲ませたり、カンカルのカジノで言い寄って、彼女の脇鉄砲をくらった男たちの名を尋ねたりした……。

「あら！ あら！ カンカルのカジノですって！ お生憎さま、カンカルにはカジノなんかありませんのよ！」

彼女は、見事な齒列の半円をのぞかせて笑った、白い靴の先でバレリーナのように回転した、コケットリーにいたずらっ気が加わった。フィリップの方だけは、故意に見ようとしなかった。彼はピアノの後ろの、銅製の水盤に活けたあざみの大きな花束の陰から、寂しそうに彼女を見やっていた。

「僕は間違っていた」彼が自分に言い聞かせた。《彼女はとても美しい。これは大した新事実だ！》

客人がレコードに合せてヴァンカにバランスロを教えてやろうと言ひ出したりしたので、フィリップはそつとすべるようにして戸外へ出た、砂浜へ駆けつけた、そして砂丘のとある窪みに体を丸めこんで寝転んだ、頭を自分の腕に、腕を自分の膝にのせた。肉感的な傲慢さに溢れた新しい一人のヴァンカが、閉ざした彼の胸の裏からいつまでも消えなかった。それは急に丸味の出してきた肉体に育ち上がって、武装のできたコケットなヴァンカであり、存分に意地悪をして反抗するヴァンカであった……。

「フィル！ フィルってば！ わたしあんたを捜していたのよ……。どうかしたの、あんた？」彼の思ひの主が、息を切らせてそばへ来ていた、そして、額を無理に上げさせようと、子供っ

ぼく、彼の髪をわし掴みにして引つ張った。

「どうもしてはいないよ」かすれた声で彼が言った。

彼は恐る恐る眼を開いた。砂に跪いて、彼女はオーガンディーの十の裾飾りを皺くちやにして、インディアンの娘のように、這いつくばって動き回っていた。

「フィル！　お願いだから怒らないで頂戴……。わたしに何か根に持つてることがあるんだわ、きつとあんたは……。フィル！　わたしが誰よりも深くあんたを愛してると知ってるでしょう。何か言つて頂戴よ、ねえ、フィルつてば！」

彼は、先がた心を苛々させられたあの束の間の美しさを、彼女の上に捜した。それなのに、これはもはや慌てている一人のヴァンカ、真剣な恋の切ない執着と不器用さと卑下の気持を、あまりに早く背負わされた一人のヴァンカでしかなかった……。彼は、彼女が接吻している自分の手を、もぎり取るように引つ込めながら言った、

「よしてくれ！　あんたにはわからないんだ、あんたにはいつだって何一つわからないんだ！……さあ、起き給え！」

そのくせ、彼は捜したものだつた、皺になったローブを直してやつたり、帯のリボンを結んでやつたり、風で逆立った固い髪を撫でつけてやつたりしながら、彼は捜したものだつた、先がたちらりと見たあの可憐な偶像の姿を、もう一度彼女の上に刻み上げたいと。